

平成 29 年度 JICA 研修 災害に強いまちづくり戦略

- JICA Strategy for Resilient Societies to Natural Disasters -FY2017



研修期間：平成 30 年 1 月 8 日～2 月 24 日（7 週間）

研修場所：神戸市/岩手県/宮城県/熊本県

研修内容：各国の状況に即した災害に強いまちづくり戦略を立てることに資するため、災害マネジメントサイクル（Disaster Management Cycle）の視点から、初動・応急対応（Relief・Response）、復旧・復興（Recovery）、減災（Mitigation）、予防（Preparedness）の各フェーズにおける有効な手法・取り組みを学ぶ

参加研修員：8 か国 8 名（バハマ、ボスニア・ヘルツェゴビナ、チリ、コロンビア、エジプト、ネパール、パプアニューギニア、スリランカ）

当財団では、独立行政法人国際協力機構（JICA）から委託を受け、公益財団法人神戸都市問題研究所協力の下、自国で防災計画策定に関わる 8 ケ国の行政官を迎え、今年 1 月から 7 週間「災害に強いまちづくり戦略」研修を実施しました。

本研修は、1995 年の阪神・淡路大震災、そして、2011 年の東日本大震災、2016 年の熊本地震など、我が国における過去の大災害から得た教訓・経験及びその後の自然災害に強いまちづくりの要素を参加国の研修員と

共有した上で、各国の社会的背景を踏まえた、災害被害の軽減に資するアクションプランを研修員が作成し、自国における災害に強いまちづくりのため、防災計画策定に活かすことを目的としています。この研修は災害マネジメントサイクルをもとに、「初動・応急対応」、「復旧・復興」、「予防・減災」「事前準備・防災教育」について、週毎に学ぶよう構成されており、それぞれのテーマに沿った取り組み等について、神戸市をはじめ、地方自治体関係者及び研究機関の専門家、大学の教授などにご講義頂きました。



研修最終日の閉講式にて



~~~~~研修を振り返って~~~~~



この研修は過去3年間の成果を踏まえ、継続実施がされています。今回も座学だけではなく、東日本大震災の被害を受けた岩手県、宮城県及び熊本地震の災害現場を視察しました。

研修前半では、冒頭に各研修員自身の職務内容や自国の災害情報などを話し合う「ジョ



研修員一行が1月17日に東遊園地で開催された阪神・淡路大震災の追悼行事「希望の灯り」に参加。

ブレポート発表会」を実施し、研修員の間でお互いの国の状況について情報共有をしました。また、研修期間が長くなることから、研修員に日本の文化と歴史を知ってもらうため、日本語講座だけでなく、歴史を学ぶプログラムも取り入れました。研修で学んだ日本語は、2か月近い日本での滞在と、講師への自己紹介の時大いに役立ちました。

1月17日は、震災の経験と教訓を発信し、阪神・淡路大震災を忘れずに語り継ぐためのメモリアルウォークに参加した後、コー

スリーダー案内のもと、東遊園地で開催された阪神・淡路大震災23年追悼行事「希望の灯り」に参加しました。また、日本最初の環境防災科をもつ兵庫県立舞子高等学校を訪れ、防災対策を取り込んだかまどベンチを見学し、同校生徒と各国の災害に関する意見交換をしました。同学校のかまどベンチは、災害時に温かい食べ物を提供するだけでなく、人と人がつながる起点になるという意図で、滋賀県立彦根工業高校の生徒が発案し、岩手県立宮古工業高校の生徒が設計しています。同校の災害への備え、防災対策の普及への努力が研修員に深い印象を与えました。

そのほか、神戸市及びNPO法人から、



青谷地区まち歩きを通じて、研修員がハザードマップを作成し、発表。

消防、水道の緊急対応、避難所・仮設住宅、災害広報、また、災害時のジェンダー問題について、ご講義頂きました。また、三木市にある広域防災拠点を見学した際は、研修員が火事を想定した「煙体験訓練」及び地震のゆれを体験できる地震車を体験し、阪神・淡路大震災や、東日本大震災の際と同じ揺れも体感しました。1月22日には、楽しみながら防災知識が身につく「イザ！カエル大キャラバン」イベントにも参加しました。研修員はこのイベントに深く興味を示し、自国でも実



「イザ！カエル大キャラバン」

研修員が楽しく防災知識を身につけるイベントに参加。

施したいという声が多くあがりました。

本研修では、まだ一部途上国の研修員にとって、聞きなれない心的外傷後ストレス障害のケア（PTSD 心のケア）の講義も実施しました。講義前に、研修員が日本語で自己紹介をし、その後、講師が研修員の国の言葉で話し掛けたことで研修員との距離が一気に縮まり、PTSDの話題を熱心に聞き、多くの質問がされました。

研修の中盤では、被災地の現場視察とし、研修員が3泊4日で東北へ行きました。岩手県釜石市、宮城県南三陸町、東松島市を訪問

し、行政の方に当時の被災状況、その後の復興計画や復興段階での課題などについて、話を聞きました。今回の研修で初めて気仙沼のコミュニティFM局も訪れ、話を聞いたあと、研修員一人ずつ自国の言葉で気仙沼の住民に応援のエールを送りました。また、南三陸町観光協会の語り部ガイドの被災経験談は生々しく、研修員の心に深く刻まれました。東松島地域住民の方と意見交換をした際、チリとネパールの研修員が住民の方に対して自国の災害事情を説明し、お互いに情報を共有し合いました。青谷地区では、研修員が実際のまち歩きを通して、災害時危険の場所を想定し、写真を撮り、メモを取った上で、ハザードマップを作成し、発表しました。この活動を通して、研修員がハザードマップの活用方法や地区防災計画の作成方法を学び、その後のアクションプラン作成の手助けとなりました。

住民による自主防災組織「防災福祉コミュニティ」（通称、「防コミ」）では、防コミの統



閉講式にて研修員代表のスピーチ模様



共創の雰囲気の中で行われた最後のワークショップ成果物がデザイン凝ったものとなりました。

括をされている神戸市消防局予防課より結成背景や行政からのサポートなど理論的な内容について、話していただいた後、実際に東灘区魚崎町で活発に活動されている「魚崎町防災福祉コミュニティ」の会長及びメンバーの方々から、実践的な活動内容についての講義を受けました。研修員はそこで住民がいかに災害に備えて活動をしているのか、理解を深めることができました。消防局講師の「神戸を世界一安全なまちにすることがぼくの夢」との言葉は研修員の記憶に強く刻ま

れたに違いありません。

研修の後半、研修員一行が熊本地震の際、大きな被害を受けた益城町を訪れ、地震当時の状況の話を伺ったあと、断層の現場も見学しました。また、豪雨被害のあった熊本市の白川河川の現場も視察し、国土交通省の担当者から整備などの改善法について話を伺いました。

昨年と同じく、今回の研修も、各週の最終日に学んだ内容を振り返るため、半日を設け、何を学んだか、また、学んだことが自国でどのように活用できるかについて、研修員をグループに分け、ワークショップを実施しました。

コースリーダーがアイスブレイク、研修のルールとして使用されたキーワード“LOVE”（Listen/Open mind/Voice（発言する）/Enjoy）のインプットが、大きな役割を果たし、研修員が研修中、終始意欲が高く、学び合い、助け合い、そして楽しい雰囲気の中でお互いの経

験や知識を共有しました。

講義や視察を通して知識を深めるだけでなく、学んだことを整理する時間をもつことでよりよい理解につながったと思います。

講義・視察を通じて、日本で学んだことを自国でどのように活用し、実践していくかについて、8名の研修員全員が、自身の業務上抱える課題解決のための行動計画アクションプランを作成し、研修最終日に発表しました。世界中で自然災害が多発する現在、研修員がこの研修で得た知識・経験を今後、自国の災害に強いまちづくりに活かしてくれることを心より楽しみにしています。

研修担当：事業課 井手 加奈子



委託元機関： 独立行政法人国際協力機構(JICA)関西国際センター
研修指導機関： 公益財団法人 神戸都市問題研究所/兵庫県立大学
講義/視察先： 神戸市、神戸都市問題研究所、兵庫県立大学、アジア防災センター、人と防災未来センター、兵庫県防災企画課、兵庫県教育委員会事務局、兵庫県広域防災センター、NPO法人プラスアーツ、多文化と共生社会を育むワークショップ代表、ひょうご震災記念21世紀研究機構、歴史街道推進協議会、名古屋大学、釜石市総務企画部広聴広報課、釜石市復興推進本部事務局、釜石リージョナルコーディネーター協議会、株式会社ラデオ気仙沼、(社)南三陸町観光協会、(社)宮古観光協会、奥松島観光ボランティアの会、一般社団法人 東松島みらいとし機構(HOPE)、東松島市移転対策部、野田北ふるさとネット、森崎建築設計事務所、防災インターナショナル、兵庫県こころのケアセンター、大阪管区气象台、国土交通省近畿地方整備局六甲砂防事務所、国土交通省九州地方整備局熊本河川国道事務所、神戸すまいまちづくり公社、魚崎町災福祉コミュニティ、兵庫県立舞子高等学校

【順不同、敬称略】